

世間に振り回されず，基本に立ち帰ろう（＜特集＞2010年の筑波大学の教育を考える）

著者	佐々木 建昭
雑誌名	筑波フォーラム
号	59
ページ	53-56
発行年	2001-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/8329

世間に振り回されず、基本に立ち帰ろう

佐々木建昭

数学系教授

【概要】

現在、学校（小・中・高）は我儘な児童・生徒に振り回され、大学は自立できない学生・院生に振り回され、教育全体が社会に振り回されている。学生を甘やかす施策は止めて、努力し勉強しようとする学生を伸ばす施策に切り替え、制度を簡素化しよう。学生には信賞必罰で対処して自立を促すべきだが、その為には世間に胸の張れる教育と研究を行う必要がある。

昨今、世間は教育論でかしましい。専門家の意見を聞くとどれも尤もらしく思えるし、文部（科学）省は“適切な”施策を講じてきたのだろうが、学生の質はどんどん低下しているらしいし、自分でもそう実感する。一体、どうなっているのか？ どこかに根本的な判断ミスがあるに違いない。

人間は根本的に性善であるとの説と性悪であるとの説がある。どちらが正しい

のか、私には断定できないが、生物学者から「生物は遺伝子の乗物だ」とか「遺伝子は利己的だ」などと聞くと、性善説の方が分がありそうに思える。デパートで玩具欲しさに床に転がってダダをこねる子供や、バブルのとき先を争って土地やゴルフ会員権を買収した大人を見れば、性善説に組みすることはできない。私は一時期コンピュータソフトを開発していたが、そこでは「人間は生来の怠け者で、注意してもすぐに間違え、監視されなければ規則を無視する」ことを前提にプログラムを組むべし、と言われていた。ただし、常に怠けるわけではなく、欲望に駆られると信じられないほど頑張る存在でもある。スポーツで好成績を挙げたい、良い大学へ入りたい、凄腕の研究をして世界の称賛を浴びたい、等の場合がそれに当たるであろう。

一方、現在の教育や政治は（少なくとも建前では）性善説に立脚しているよう

だ。「子供は本来、無限の才能を持ち、好奇心(=勉強心)に満ちている。それを自由に伸ばすのが教育で、行動を規制したり、勉強を押しつける教師は悪い教師である」とか、「国民は善良で、賢い選択眼を持ち、勤労意欲に満ちている。労働者が喜んで働ける職場を提供するのが経営者の義務で、嫌な仕事を押しつける経営者は悪い経営者である」、という具合である(表現はやや極端だが…)。

上記のような考えに基づく教育は何をもたらすであろうか? 学校では悪いことは全て教師の所為にされ、教師には次々と制約と職務が課される一方、子供は「悪いのは全て先生のせいだ」と我儘放題になるのは必定であろう。しかも、子供は幼児期より親に手取り足取り世話をされ、「嫌なことや難しいことは全て親や先生がやってくれる」と思って大きくなっている。現在の学生や院生の多くが「細かく指示しないと何もしない」、「困難に出会うとすぐに逃げ出す」傾向を強く持つのは故無きことではない。その結果、(理系においては)卒論や修論を書くにも手取り足取り世話をし、代筆紛いのことまでしなければならなくなったのが現在の大学の姿であろう。そして、この悪弊は大人も有しているから始末が悪い。借金までして土地購置に加担

したのに、バブルがはじけると「悪いのはバブルの所為だ」と責任転嫁し、「国が何とかしてくれる」と国に甘えている。その結果、国が傾き始めたのが現在のわが国の姿であろう。

上記では悪い面から人を見てきたが、逆の面からみると希望が見えてくる。私は(日曜を除く)毎日、陸上競技場で陸上部や同好会の学生たちの側で鍛錬しているが、教育者の目で見ると彼ら・彼女らは絶賛に値する。まず、練習に非常に意欲的である…意欲的すぎて練習時にぶっ倒れたり、骨折したりするほどである。そして、自律的である…誰に指図されなくても黙々と練習し、(コンパの席を除けば)禁欲的と言えるほど摂生している。学業の面では、「学年で10%に入っている…下から数えてだけど」というヤツもいるが、除籍になったという話は全く聞かない。学類長職にあったとき、同じことはクラス委員や他の多くの役職学生らにも感じた。彼らは非常に熱心にクラス活動等で働いてくれたが、人間的にも非常に素晴らしく、さらに成績も抜群に良かった。もしも筑波大学の平均的學生がこのようになったならば、教育は大成功と言えるに違いない。

現在の教育の行き詰まりは、幼児期から子供を甘やかしてスポイルし、我儘に

なったり勉強しなくなった子供を叱らないで、学校に責任を押しつけてますますスボイルし、大学までもが努力と勉強をしようとしないう学生を退学させるのではなく、そのような学生に合わせて制度を組むようになってしまったことにあると思う。すなわち、昨今流行りの経済用語をもじって言うならば、スボイルがスボイルを生む、スボイル・スパイラルに陥っていると言ってもよいであろう。このスパイラルから抜け出すには、一刻も早く、どこかで連鎖を断ち切る必要がある。

教育は性悪説に基づいて行うべきだと思う。子供は親や先生が厳しく躾けないと我儘に育ってしまう。生徒や学生は、「社会で活躍して名をあげる」でも、「自然は美と驚異に満ちている」でも、何でもいいから動機づけて、努力と勉強を誘導すべきだ。成人した学生を手取り足取り世話するのは、学生自身の為にならないからすべきでない。「高校で未履修の科目を大学で補習授業する」とか、「1学期の授業で落ちこぼれた学生のために夏休みに補講をする」など、後向きで手間がかかることもすべきでない。これらは全て学生自身の責任で解決すべき事柄である。逆に、努力し勉強する学生をさらに伸ばすような施策を講じるべきであ

る。それは労力に比して効果が大きいし、学生にとっても教官にとっても楽しいことである。そして学生には、何よりも努力の大切さと厳しさを教えるべきである。なお、教育では褒めることを基本とすべきだが、悪事に関してはビシッと処罰すべきである。この点、本学は褒めることは減多にせず、悪事に関しては非常に寛大であると思うのは私だけだろうか？

「大学だけが一人相撲をしても…。まず親がしっかり教育してくれないと…」との意見がでてこよう。しかし、教育に関して大学が指導性を発揮しないで、我々の理想とする教育などできるはずがない。「自分の子供だけは…」と、幼児教育を施したり、親が召使のように子供にかしづいて勉強させても、大学に入ってから引き籠りになったり、将来、ロクな人間になりませんよ、ということを大学が積極的に社会に発信すべきである。幸か不幸か、バブルがはじけて10数年、世の中の厳しい現実が伝わったのか、学生たちの意識も一頃に比べれば随分と改善されてきたように思う。大学が真剣に教育を改革しようとするれば、出来る時代になってきたと思う。

最後に、我々教官の意識と行動について述べたい。大抵の教官は「今の学生は

…」と眉をひそめるが、我が身を顧みて本当に胸を張れる教官が何割いるであろうか。聞いた話で恐縮だが、ある語学の試験では毎年、同じ問題が出題されるそうだ。もし事実なら、とんでもない話である。学生に厳しさを要求し、学生を引っ張っていくには、我々教官が学生から信頼され尊敬されていなければならない。そのためには最低限、どこに出しても胸を張れる授業をする必要がある。教官の給料が税金から出ている以上、授業評価や情報公開は当然である。「評価が一方的なものになるのでは…」という心配は杞憂である。自然学類での経験によれば、学生から厳しく批判される授業がある反面、難しい授業でも高く評価されるものもある。学生は教官のことをよく見ているのである。次に、学生の尊敬を得るには立派な研究をすることである。

自分の研究分野は狭くて人から評価されない、などというのは泣き事である。たとえ世界で一人しか研究者がいないテーマでも、自分自身に誇りを持てる研究なら、それは教官の態度に現れ、学生から尊敬されるに違いない。そのためには、雑務を削り、研究時間を確保すべきである。

書き終えて読み返すと、教育が社会に振り回されたことを強調するあまり、若者のことをボロクソに書いてしまったと反省している。筑波大生の大部分は素直で出来がよく、磨けば光るものを持っている。是非、彼らが希望と誇りを持てるようになって欲しいが、彼らの模範となるべく、希望と誇りを持って厳しく人生に対処している教官の姿を見せたいものである。

(ささきたてあき 計算機数学)

